



Title	韓国語母語話者を対象とした日本語のプロソディー研究再考(1)
Author(s)	韓, 喜善
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 29-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85088
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韓国語母語話者を対象とした日本語のプロソディー研究再考(1)

韓 喜善

要旨 韓国語を母語とする日本語学習者の日本語の音声の問題のうち、本稿では、アクセントについて検討を行なった先行研究を概観した。学習者は日本語のアクセントを適切なパターンで使用されていないという報告とともにその原因について述べ、具体的に次の3点を課題として挙げた。すなわち、(1)日本語のアクセントの弁別において、下り目だけでなく、上がり目も含めてピッチの変化に注目させる必要があること、(2)アクセントの指導において、単に「高」「低」の2段階のみでの説明について、句や文レベルで対応できないこと、(3)学習者が日本語のアクセントを判断する上で、強さや長さなど、高さ以外の韻律的特徴に注目している可能性があり、長さ以外の観点からも調査を行う必要があることの3点である。以上から、体系的な音声教育の基礎となる調査においては、日本語のアクセントについて日本語母語話者の場合とは異なるアプローチが必要であることを指摘した。

1. はじめに

韓国語は日本語¹⁾と統合構造が類似しており、語彙の中に漢字語を多く含むことから、韓国語を母語とする者は日本語の習得において容易な面があると言われている(梅田 1985、関 1989)。その一方で、音声の面においては、分節音、リズム、アクセント、イントネーションについての問題や不自然さが多く指摘されている(加藤 1978、梅田 1985、関 1989、金 1988、松崎 1999、宇都木 2004 等)。しかしながら、教育現場においては体系的かつ具体的に音声の教育ができる人材や教材がともに不足しており、音声の教育に関しては、日本語母語話者の日本語教師が教えれば、学習者も自然に日本語の音声習得できるはずだという安易な風潮があるようにも思われる。

そこで本稿では、韓国語母語話者で日本語を学習する者(以下、韓国語母語日本語学習者と称する)の日本語の音声上の問題のうち、特にアクセントを扱った論考を概観することで、軽視されがちな日本語の音声教育上の課題と知見を見出し、今後の体系的な音声教育を考える上での基礎的な課題の再検討を行うことを目的とする。

2. 韓国語母語日本語学習者にとっての日本語のアクセント

日本語のアクセントは、自然さや語の弁別に深く関わっている。他方、韓国語は、慶尚道方言や咸鏡道方言のような一部の方言を除けば、示差的アクセントのない無アクセント言語であり、語レベルで規定されたパターンはない(Jun 1993、福井 2000)。そのため、韓国語母語日本語学習者は日本語の学習においてもアクセントに対する意識が希薄であり(大村 1969)、アクセントの概念についても理解が困難

1) 本稿で言う日本語とは、主に東京およびその近郊で話されている日本語を指す。

である。さらに、日本語は語ごとにアクセント型が恣意的に決まっているため、学習者はそれを個別に覚えなければならず、基本的に日本語のアクセントは学習の負担が大きい学習項目だと言える。また、日本語のアクセントは隣接する音との相対的な高さの違いや語中における下がり目の有無によってパターンが決まるが、連続的に変化する人間の声の高さを「低」「高」の2段階に処理することは、無アクセント言語話者にとっては簡単ではないことは想像に難くない²⁾。つまり、単に「高低アクセント」「ピッチアクセント」「高さアクセント」等と言われても、日本語母語話者のような音の高さの処理の仕方自体が、韓国語母語日本語学習者にとって身につけることが容易ではないものであるため、日本語のアクセントの教育においては日本語母語話者の場合とは異なるアプローチを検討していく必要がある。例えば、関 (1989)は、アクセントの下り目だけでなく、上がり目についても教育が必要であるという見解を述べており、松崎・河野 (2010)では、文や句レベルにおいては「高」「低」の2段階だけでは対応できないという見解を示している。

韓国語母語日本語学習者による日本語のアクセントは中高型 (大西 1991、戸田 1999、福岡 2008 等) ないし平板型 (大西 1991、戸田 1999) になる傾向があり、頭高型の生成が困難であるとされている。知覚判断においても、頭高型は他のアクセント型より困難であることが報告されている (李・鮎澤・西沼 1997)。その原因については、韓国語の韻律の影響が考えられる。ソウル方言の場合、アクセント句は基本的に低い音調から始まって上昇し、再び下がるパターンを示すため、日本語の語の生成においてもそのようなパターンになりやすいと考えられる (Jun 1993)³⁾。このような韓国語母語日本語学習者の日本語の音声は、日本語母語話者にとって違和感を与えるものと考えられる。郡 (2019b)は、標準日本語を話す日本語母語話者による1モーラから3モーラの語の音声に対して、本来と異なるアクセント型に変更した刺激音を標準日本語母語話者に聞かせて自然度を判定させた結果、特に頭高型と他のアクセント型 (尾高型、平板型) に関しては相互のアクセント型が入れ替わった場合に不自然さが際立っていたと報告している。特に、地名など日常的で身近な語であれば、違和感はさらに大きくなるという。梁 (2015)の中国語母語話者による音声に対する日本語母語話者の評価においても同様の結果が示されている。

その一方で、韓国語母語日本語学習者は第1音節が高く話されるとの報告も見られている (大坪 1987、助川 1993)。これについても、アクセント型の誤用の可能性に加え、韓国語の韻律の影響も考えられる。

2) 韓国語母語日本語学習者の日本語の音声は平坦な音調で、ピッチレンジが狭いことも知られている (李 1995、関 1989, 2007)。

3) Jun (1993)によると、ソウル方言のアクセントの最小単位は、アクセント句 (Accentual Phrase) であるという。また、アクセント句の基本音調を高さで表しており (H: 高音調、L: 低音調)、高さは韓国語の韻律を決定づける上で重要な韻律として検討を行なっている。アクセント句とは、1つ以上の単独の語から形成し、一定のピッチパターンによって特徴づけられる単位のことを指す。Jun (1993)は、ソウル方言のアクセント句の基本音調は、1音節の場合、1音節内にLHの両方が現れ、上昇のピッチパターンをとる。2音節のアクセント句では第1音節がLを第2音節がHをとる。3音節のアクセント句では、第1音節がLで、第3音節がHとなり、その間は上昇していく。4音節以上の場合「LHLH」、5音節以上に長くなった場合は第2音節のHと最後からの2音節目のLの間をなだらかに下降していく「LH...LH」という韻律を持つ。

ソウル方言の場合、文頭や句頭において子音のマイクロプロソディー (microprosody) が強化されやすく (Cho and Keating 2001)、平音 (/p, t, k, ts/) と有声音 (/m, n, l/) が来ると、上記で述べたように第1音節は低いピッチの基本的なパターンになるが、激音 (/p^h, t^h, k^h, ts^h/)、濃音 (/p^{*}, t^{*}, k^{*}, ts^{*}, s^{*}/)、摩擦音 (/s, h/) が来ると第1音節のピッチが高くなるパターンになるという (Jun 1993) ⁴⁾。この影響は、日本語の生成 (福岡 2008) だけでなく、知覚判断 (鄭・桐 1996⁵⁾) にも影響があることが報告されている。いずれの場合も、韓国語母語日本語学習者は日本語のアクセントを適切なパターンで使用していないことがわかる。

一方、韓国語でも慶尚道方言は高低アクセントをもつと言われていることから (関 1989、趙 2007)、慶尚道方言話者は日本語アクセント知覚においてピッチの変化に敏感であろうと予想される。鮎澤・小高 (1998)によると、日本語のアクセント型の弁別においては慶尚方言話者はソウル方言話者より正答率が高く、稲田 (2013)でも同様の報告がある。しかしながら、日本語のアクセントの知覚判断においては、慶尚道方言話者であってもソウル方言話者との間に有意差が見られないという報告もある (助川・崔・前川・佐藤 1995)。その原因について、助川・崔・前川・佐藤 (1995)は、音節言語話者はモーラ間の相対ピッチ判断を行うことが難しいためであると考察している。別の原因の可能性として、慶尚道方言は高低アクセントに声調が合わさった特性を持つことが報告されている (姜 2017)。また、ソウル方言においても、プロソディーを構成するものとしては、高さだけでなく、強さや長さ、音節の重さなど、複数の韻律が関わっている可能性がある⁶⁾。

郡 (2019a)は、上級の韓国語母語日本語学習者の音声について調査を行い、日本語の文の読み上げにおいてアクセントとイントネーションの両方が適切に運用されていないことを示した。さらに、アクセントの改善とイントネーションの改善が行われた場合、それらが相乗的に日本語の自然さの評価を高める上で効果をもたらすと述べている。このことは、日本語のプロソディーの学習は、単独での語レベルのみならず、句や文レベルで取り組む必要があることを示している。句や文レベルでの音声上の問題についてもいくつかの報告がある (関 1989, 1994、민 2004、李 1995、宇都木 2004 等) が、これらについては、次稿において検討する予定である。

3. 終わりに

本稿では、日本語のプロソディーのうち、アクセントにおける韓国語母語日本語学習者の特徴を概観した。プロソディーは日本語能力が高くなるにつれて、あるいは学習歴が長くなるにつれて自然に習得されるような性質のものではないという指摘 (민 2004) やその根拠となり得る報告も見られる (郡 2019a)。そのため、学習の初期から日本語のアクセントは語の弁別機能、自然さ、統語機能が関わることに気づ

4) 有声音には有声音の他、母音も含まれる。

5) 鄭・桐谷 (1996)は、語頭に有声音と無声音で始まるミニマルペアについて、F0 を操作した刺激音を作成し、東京出身者と韓国語母語話者に聞かせた。その結果、韓国語母語話者は東京方言話者に比べて F0 の低高に大きく影響されて有声音と無声音を判断する傾向があった。

6) ソウル方言のアクセントの強さと長さを検討した論考として宇都木 (2002, 2006) が挙げられる。

かせることが重要である（金 1988、민 2004）。しかしながら、日本語のプロソディーに関する基礎的な研究は不十分であり、明らかにすべき課題が多い。今後、句や文レベル、さらには談話レベルまたはパラ言語学的なプロソディー研究についても検討し⁷⁾、韓国語母語日本語学習者の音声教育について、総合的な検討を加えていきたい。

参考文献

【日本語による文献】

- 鮎澤孝子・小高京子 (1998) 「『東京語アクセントの聞き取りテスト』 21 言語グループの母語別・成績別正答率」『新プロ「日本語」総括班研究論文集』 1, pp. 57-71.
- 稲田朋晃 (2013) 「ソウル方言話者と慶尚道方言話者による日本語アクセント核のピッチ知覚：知覚の離散性に注目して」『音声研究』 17:1, pp. 6-15.
- 李明姫 (1995) 「韓国人学習者の日本語の疑問文に見られる母語の韻律の干渉」『日本学報』 34, pp. 91-120.
- 李明姫・鮎澤孝子・西沼行博 (1997) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』 38, pp. 87-98.
- 宇都木昭 (2002) 「朝鮮語ソウル方言のプロソディーの基本構造について」『朝鮮学報』 184, pp. 35-70.
- 宇都木昭 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」『音声研究』 8:1, pp. 96-108.
- 宇都木昭 (2006) 「朝鮮語ソウル方言のアクセント句におけるインテンシティーの特徴」『実験音声学と一般言語学-城生伯太郎博士還暦記念論集-』, pp. 107-116, 東京堂出版.
- 梅田博之 (1985) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』 55, pp. 48-58.
- 大坪一夫監修 (1987) 『日本語の音声 (I)(II)』アルク NAFL Institute 日本語教師養成通信講座.
- 大西晴彦 (1991) 「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会紀要』 15, pp. 52-60.
- 大村益夫 (1969) 「朝鮮語の発音と構造-日本語との比較対照-」『講座日本語教育』 5, pp. 113-129, 早稲田大学語学教育研究所.
- 加藤藤子 (1978) 「韓国人に対する日本語教育」『日本語教育』 35, 日本語教育学会, pp. 65-77.
- 姜英淑 (2017) 『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』勉誠出版.
- 金仁炫 (1988) 「韓国人に対する日本語教育法の研究(1)」『教育学研究紀要第二部 (教科教育学部門)』 34, pp. 107-112, 中国四国教育学会.
- 郡史郎 (2019a) 「じょうずな読みとアクセント, イントネーション-非母語話者の読みの改善例-」『言語文化研究』 45, pp. 179-190.
- 郡史郎 (2019b) 「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『言語文化共同研究プロジェクト 2018』, pp. 17-28.
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向」『日本語音声と日本語教育』文部省重点領域研究成果報告書.
- 助川泰彦・崔絢・前川喜久雄・佐藤滋 (1995) 「韓国人日本語学習者によるアクセント知覚と音節構造に

7) 例えば、韓国語母語日本語学習者は、日本語の疑問文の上昇調が下降調になることが報告されており（加藤 1978）、例えば「どこへ行きますか」の文末を上げずに下げて生成するため、詰問調に聞こえてしまうという。

- 関する考察』『電子情報通信学会技術研究報告. SP 音声』 95:41, pp. 61-66.
- 鄭恩禎・桐谷滋 (1996) 「ピッチパターンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響：韓国語母語話者と日本語母語話者の比較」『音声研究』 2:2, pp. 64-70.
- 趙義成 (2007) 「慶尚道方言とソウル方言」『韓国語教育論講座』 1, pp. 203-219, くろしお出版.
- 戸田孝子 (1999) 「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察-英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて-」『文藝言語研究 言語篇』 36, pp. 89-111.
- 福井玲 (2000) 「韓国語のアクセント」『音声研究』 5:1, pp. 11-17.
- 福岡昌子 (2008) 「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉-語頭破裂音を含む語のアクセント-」『三重大学国際交流センター紀要』 3, pp. 45-59.
- 松崎寛 (1999) 「韓国語話者の日本語音声-音声教育研究の観点から-」『音声研究』 3:3, pp. 26-35.
- 松崎寛・河野俊之 (2010) 『日本語教育能力検定試験に合格するための音声』 23, アルク.
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』 68, pp. 175-190, 日本語教育学会.
- 関光準 (1994) 「韓国語疑問文イントネーションの音響的分析と合成音声による知覚実験-日本語との対照研究のための基礎的資料として-」『音声学会会報』 205, pp. 29-33.
- 関光準 (2007) 「韓国語ソウル方言のイントネーション」『音声研究』 11:2, pp. 16-27.
- 梁辰 (2015) 「アクセントの誤用パターンが自然度評価に与える影響の比較」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』, pp. 122-127.

【英語による文献】

- Cho, T., P. Keating (2001) “Articulatory and acoustic studies on domain-initial strengthening in Korean,” *Journal of Phonetics* 29:2, pp.155-190.
- Jun, S. (1993) “The Phonetics and Phonology of Korean Prosody,” Ph. D. dissertation, Ohio State University.

【韓国語による文献】

- 민광준 (2004) 한일 양 언어 운율의 음향음성학적 대조 연구, J&C.